

月例会(吟行句会)

(平成 18 年 9 月)

2006/9/9 は俳句フォーラム葦の会主催の吟行句会だった。蒸し暑い日だったが、かっと照りつける日差しもなく、雨にも遭わなかったかったので、天候的にはまずまずというところ。18 人の参加を予定していたが、1 人欠けて 17 人。東京駅から東御苑を散策ののち、皆で昼食。その後いつものちよだ PS で句会となった。全体に句会の始まりは 30 分程度遅れたが、無事予定の通りの手順で終了した。そしていつもの懇親会。今回はロビーでの懇親会になったが、却って動きやすくていい懇親会になった。17 名という参加は通常の月例会に比べると少ないが、句会としての規模はちょうどいい大きさだった。句会の席上では俳号を持っている人は俳号で呼び合ったが、NMC の報告なのでここでは若泉真樹先生以外は本名で書くことにする。

団栗の青きを拾う汐見坂

若泉真樹(典世)

団栗は檜や椎の実などの総称。来間さんが茶色に熟れた団栗を拾って来ていたが、真樹先生もまだ青い団栗を証拠品として提出された。総称だけに色々な実がある。ここでは「青」でなければならない。それが「汐見坂」と響きあうからだ。汐見坂というのは実際東御苑の中にある坂の名前だが、ここから当時は東京湾が見えたであろうことが推定される。その海も今は遠のいて、団栗の樹が茂るまでになっているが、その「青」をその実に残している。

蝸や濠の巨石の組み直し

廣瀬行夫

大手門に入って間もなく石垣修復の工事現場に出会った。確かに石垣を構成する石の 1 つ 1 つは近くで見ると大きい。そのことしか言っていないが、昔どうやってこの石を運び、組み上げたのだろうという疑問がすぐ頭に浮かぶ。

芙蓉咲く百人番所軒深し

須古悠美子

確かに昔の建物だけに、屋根の庇は大きく突き出ており、雨戸で中は見えないものの、当時は暗かったであろうと思える。原句では季語が「菊の日や」となっていたが、菊にはまだ少し早いということで芙蓉に変わった。というのもこの日 9 月 9 日は重陽の節句の日で奈良時代には観菊の行事が行われ「菊の節句」とも呼ばれていた。ただし旧暦のことなので今の暦で行くと 10 月になる。

江戸城の高みを飛び赤蜻蛉

福山秀雄

東御苑内に天主台がある。天守閣の跡だろうが、その一帯がいくらか高くなっている。特に大手町方面は高層ビルが並んでこの「高み」を見下ろしているので、決して高くはないが、ここに蜻蛉が数匹舞っていた。原句では「二三匹」と入れておいたが、予想通り直された。

以上は特選句であるが後は参加された方の句を 1 句ずつ、簡単なコメントだけで、順不同で載せる。

大奥の跡から見える芙蓉垣

木野 納

原句は「大奥の跡地の隅の花芙蓉」。大奥はTVドラマで興味があるのか数名が詠んでいた。この他に木野さんには「石垣の大名刻印花薄」という高点句もあった。

松ぼくり海の見えない汐見坂

篠原周平

最初の先生の句と同じ思いである。吟行ではよくそんなことが起こる。他の人が同じものを見てどう詠んだかも、勉強の1つである。

寄生木のあるフェニックス秋暑し

遠塚富哉

各県の樹を植えてあるコーナーがあった。宮崎県の県木がフェニックスだった。南国の樹なので余計に暑さを感じさせる。

冷やかかや古えのロマン石室に

英 公子

私はこの石室は遠くから見ただけで近くへは行かなかった。地震や火災に備えて貴重品を納めるところだったというが、一説には抜け道があたっという話もある。

目をうばうひかれてよれば実もはぜる 宮崎知子

何に目を奪われたかは分からないが、美しい実でもあったのだろう。いけばなの先生だけに花材のことが頭にあって近寄ったのだろう。

東御苑水辺に競う百日紅

石塚正郎

日本庭園には確かに紅白ピンクの百日紅が、目立つ花の少ないこの時期に妍を競っていた。実際に咲いていたからいいが、夏の季語だけに句に取り入れた人は3名だけだった。

水引草振袖家事の火の粉かな

木村一三

水引草の赤を見て江戸の大火となり江戸城本丸も焼き尽くした振袖火事を連想したところは凄い。原句は「水引は」でこのままだと切れがなく、説明調になる。

爽籟や往時を秘めたる大手門

石坂 廣

先ず潜ったのが大手門だったから印象には強く残ったことと思う。ただ大手門が閉まってるなら「秘める」感じが出るが、開いているだけに門の中には句意が広がらず、門だけに留まるのが惜しい。

皇居前ビル群変貌秋暑し

竹村尚紘

確かに暑苦しい程にビル群が建っている。ただストレートに詠んだことと三段切れめいたのが惜しい。

秋の風松の大木見得を切る

松崎和美

原句は「世の流れ松の木が見栄を張る」なので随分変わった。初参加なので致し方ないが、直す人が直せばこうも良くなる例として記憶しておけば次回は良くなると思う。

石壁に歴史のにおい花すすき

来間克己

「石壁」は「石垣」かも知れない。この句も「時を経て歴史のにおい石壁に」と、松崎さんの句同様季語がなかった。ついうっかりしがちである。後は場数が必要か。

企画書の提出まちか百日紅

阿片公男

これも百日紅を詠んだうちの1つだが、仕事のことが結局頭から離れなかったらしい。それだけに異色ではあったが他の句も主役が仕事になっており、少し楽しんで貰いたい。

仲の秋初孫の声待ちどおし

石村誠人

気持ちは分かるが、これは吟行句ではない。その分参加者の同調が得にくい。しかも「孫」俳句は通常でも人気がないので二重の損をした感じ。

昼食後、投句までしてから他用で席を外された石塚さんとはともかくとして、他の方にはほぼ満足頂けたかと思う。来年はもっと気候のいい時という希望も出たが、同じような形での月例会が適当かどうか分からない。出来るだけ多くの人に体験して頂きたいが、かと言って参加者が多すぎると句会の密度は薄れてくる。従って月例会としての俳句の会は、形を変えない限り無理があるとも言える。

なお懇親会の席等で別に添削して頂いてこちらの方が自分としては気に入っているという句があれば、申し出て頂きたい。

福山至遊記)